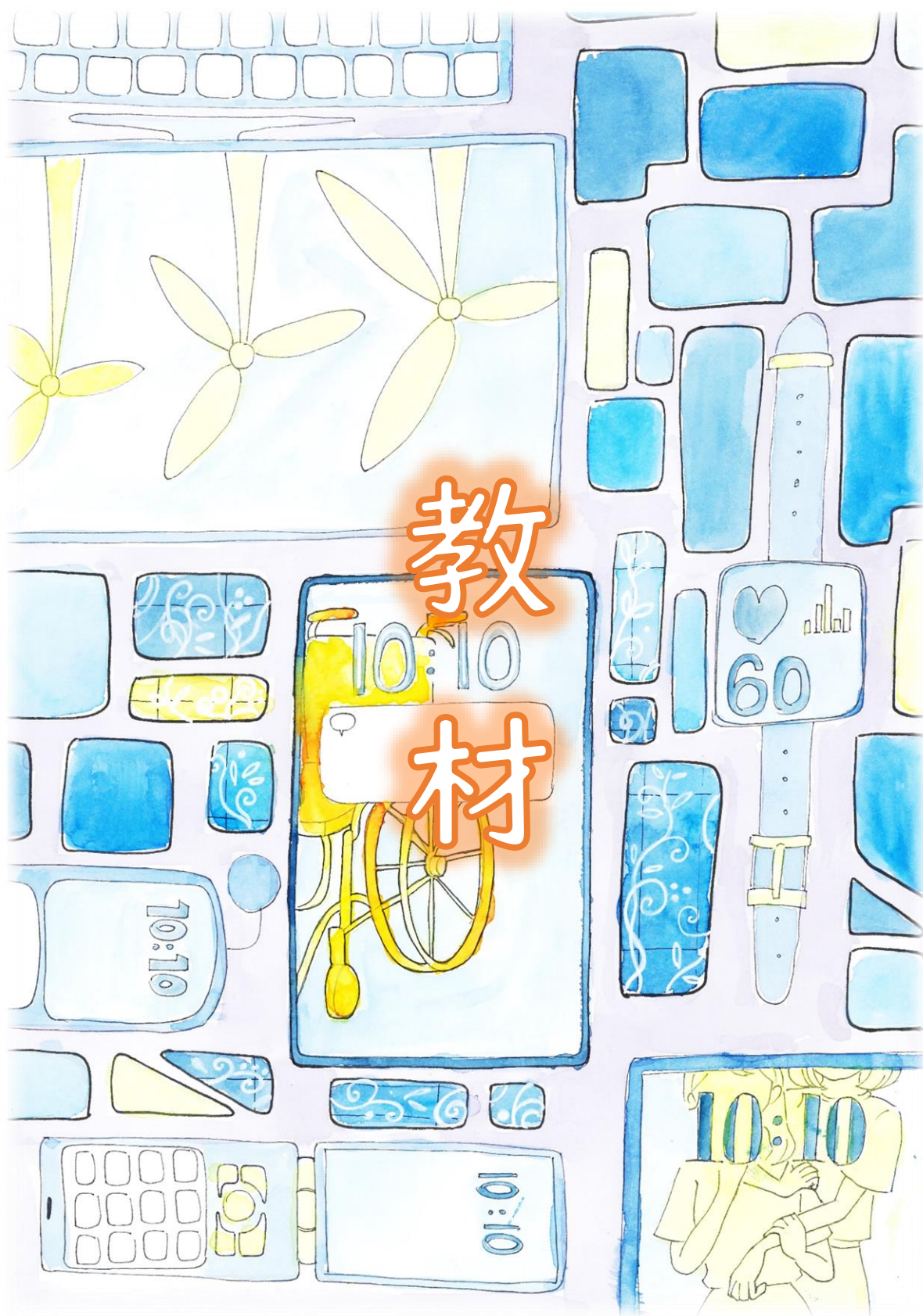




大^{だい}すきなタブレットタイム



そうたは 算数^{さんすう}の 時間^{じかん}が 大^{だい}すきです。 さいごの 五^ご分^{ふん}間^{かん}に

大^{だい}すきな タブレットタイムが あるからです。

タブレットタイムでは 算数^{さんすう}の もんだいを

たくさん とくと がめんに うつつている

たねが どん^{おお}どん 大きくなり めが でて

花^{はな}が さき ポイントが たまります。

そうたは がめんの たねから 早^{はや}く

めが 出^でて 大^{おお}きくなること^{たの}が 楽^{たの}しみです。

これは ある日^ひの そうたの 日記^{にっき}です。 大^{だい}すきな

タブレットタイムの ことについて 書^かきました。





じゅうがつはつか すい

十月二十日（水）

きようは ついに がめんの たねから めが

で 出ました。ぼくは めが おお 大きくなるのが うれしくて

あと 一もんだだけ あと 一もんだけと もんだいを

といていきました。

休み やす じかんに なっても めが き 気になっ

もんだいを といていたら ともだちと やくそくした

ブランコあそびに おくれてしまい ブランコには

のれませんでした。



じゅうがつにじゅういちにち

もく

十月二十一日（木）

きようは のこりの じかんを 見^みながら

タブレットタイムを すすめました。あとすこしで

めから はっぱが ひらきそうだったけど あした

がんばろうと おもい タブレットを かたづけました。

きようは 休^{やす}みじかに すぐに そとへ 出^でて

ともだちと やくそくした ブランコで あそべました。

はっぱは 見^みることが できなかったけど ぼくは

すっきりしました。

「そうたさん とても 大切な ことに 気づきましたね。」
先生は えがおで 日記の ノートを わたして くれました。
家へ かえった そうたは にこにこしながら 二日間の 日記を 読みかえ
していました。

あさがおの かんさつで



まりの 大すきな せい生活科かつの じ時間かんに なりました。 き今日ようは 一人一人が
そだてている あさがおの かんさつです。先生が、
「タブレットを いつかって、あさがおの は花なの ようすを とりに
行いきましょう。」
と、いいました。

校がていに 行くと うえきばちが きれいに ならび、赤や ピンク、
むらさきや 青の 花が たくさん さいていました。まりは、
「わあ、きれいな 花が いっぱい！」
と、むちゅうに なって あさがおの は花なの しゃしんを とりました。
先生は、

「まりさん、あさがおの　しゃしん、じょうずに　とれていますね。」
と、言ってくれました。

（ようし！　もっと　とってみよう。）

まりが　そう　思^{おも}ったとき、じつくりと　かんさつを　している
みきと　たけしに　気づきました。

（二人とも　いっしょうけんめい　かんさつを
しているなあ。）

（そうだ！　がんばっている　二人も
とってあげよう。）

まりは、かんさつしている　二人の顔^{かお}を
そっと　よこから　とりました。

「しゃしんが　とれたよ！」

まりは、すぐに　二人に　しゃしんを　見せました。



「えっ！　どんな　しゃしん？　わたし、うつってる！」

みきが　わくわくした　声でこえ　うれしそうに　いいました。

ところが、たけしを　見ると、なんだか　おっと　している　ようです。

「たけしさん、どうしたの？」

と、まりが　聞くと、

「ぼく、かっ手に　とられるのは　いやだよ。」

と、たけしは、おこったように　いいました。

（どうして　たけしさんは　おこって

しまったのかな。）

そんな　たけしに　まりは　びっくりして、

もう　なにも　言えなくなつて　しまいました。

まりは、自分じぶんが　やったことを　思い出し、

その　わけを　考かんがえてみました。そして、たけしに　話はなしました。



「ごめんね。わたし——。」

そうやって たけしの しやしんを けしました。

たけしは

「うん。でも、これから——。」

と、言いました。先生は 二人の

顔を やさしく 見つめ、にこっと わらいました。

つぎの 日です。今日は

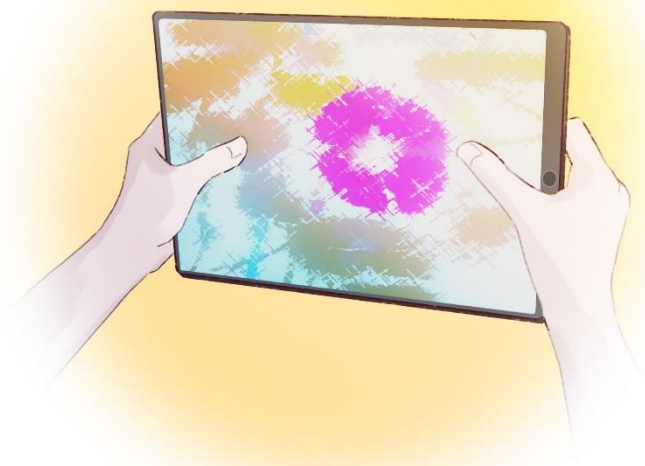
タブレットの しやしんを

つかって かんさつノートを

まとめます。

まりの タブレットには あさがおの 花が

きらきらと うつつています。



よろこびはだれに



毎年、わたしたちの学校は、埼玉^{さいたま}県^{けん}なわとび大会^{なわとびたいかい}に参加^{さんか}している。今年も全クラスで長なわとびの練習が始まった。みんな入賞^{にゅうしょう}しようと真^まけん^{けん}だ。わたしたちのクラスは、三チームに分かれて大会に参加することになった。

「見て。このチームすごいよ。」

休み時間、長なわのこつを調べていたかいとさんはクラスのみんなに声をかけた。インターネットで見つけたらしい。近くのみんなが集まってきて画面をのぞきこんだ。

「すごいなあ。ならば方やとび方のこつも出ているよ。」

「ねえ、一位^{いちい}になるような記録^{きろく}が出たら、ぼくたちも動画をのせようよ。」

「それいいね。かっこいい。」



「えっ、わたし知らない人に見られるなんていやよ。」

「のせるのってだめなんだよね。」

「でも、おもしろそうじゃないか。」

みんな話しているところで、チャイムがなった。

もうすぐ大会。今日もタブレットをじゅんびし、チームで円じんを組んだ。

「新記録しんきろくを出すぞ。オー！」

ピー、いよいよ始まった。みんな真けんだ。

「百九十八、百九十九、二百、二百一、

二百二……。」

ピー！

「うわあ、やったあ！新記録だ。」

チームのみんなとびはねてよろこび

合った。わたしはうれしくて、うれしくて、

なみだが出てきた。

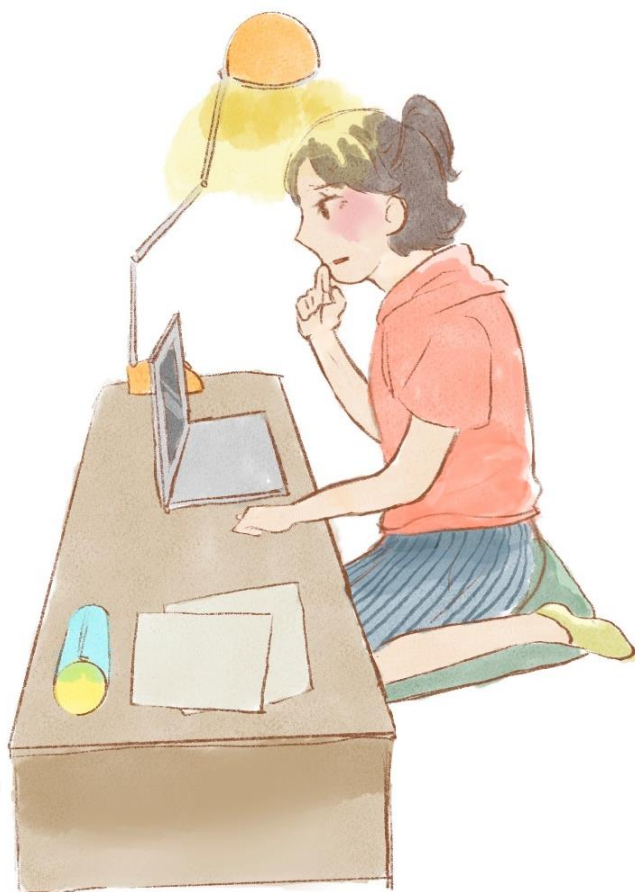


わたしは家に帰るとすぐ、お兄ちゃんに今日の記録を伝つたえた。そして、宿題のために持ち

帰っていたタブレットを開き、今日の動画を見せた。

「すごいな。たくさん練習したんだろう。よくがんばったな。お母さんもこれを見たら、きっとおどろくよ。」

お兄ちゃんもうれしそうな顔をしていた。



宿題を始めてからも、頭の中は今日のことदैっぱいだ。気がつくど、わたしはタブレットを開いて何度も何度も動画を見返していた。きんちようし、集中した時間。みんなの息がぴったりあった気持ちよさ、よろこび。これまでの練習のことや、いっしよにがんばってきた仲間^{なかま}の顔。

（記録をのべせたのは、あの動画のおかげかもしれない。）

わたしはインターネットの動画サイトを開いた。（あんな風にならび方やとび方のこつを入れれば、わたしたちの動画もだれかの役に立つかもしれない。でも……。）

動画をのせようとしながらも、わたしの頭には、動画をのせることに反対していた仲間の顔

もうかんでいた。そんなとき、仕事から帰ってきたお母さんの声が聞こえてきた。

（まずは、お母さんに動画を見てもらってから……。）

わたしはタブレットをかかえていそいで部屋を出た。でも、この日は夕ごはんを作るお母さんの手伝^{てっだ}いや宿題をしているうちに時間がすぎて、お母さんに動画を見てもらうことも、動画をのせることもできなかった。

次の日、朝の会で先生からインターネットの使い方について話があった。他のクラスでじゅ業中^{ともだち}に友達をとった写真をインターネットにのせたことが分かり、問題になったらしい。

「じゅ業中にとった写真はもちろんですが、勝手に写真や動画をインターネットにのせることはいけないことですね。それに、インターネットは写真や動画を消したつもりでいても、ずっと残^{のこ}っていることもあるんですよ。」

わたしは先生の話聞きながら、自分のしようとしていたことを思い出し、ドキドキしていた。



流れていく先



「行けっ。ぬかせ。」

「負けるな。がんばれ。」

ぼくの住む埼玉県は、海はないけれど、たくさんの川があり、「川の国 埼玉」などといわれている。ぼくの通う学校の近くにも小さな川が流れている。今クラスで大流行している遊びは、放課後のボートレースだ。ボートと言っても自分たちは乗らない。葉っぱ一まいを小川に流して速さを競い合うのだ。ぼくのボートはカナムグラの葉。公園のフェンスにまきついていてのを見つけて手に入れた。ざらざらしたさわりごちと、モミジのような葉の形がきれいで気に入っている。

「ゴール！」

「洋介さんが一位だ。」



今日のレースはぼくが勝った。レース後、ぼくたちは、自分の見つけた葉っぱについて語り合った。七月に入り、とても暑い日が続いているけれど、川のそばはすすしくてとても気持ちよかった。

その日の夜、いい気持ちでおふろから上がると、お兄ちゃんがしんこくそうな顔をしてテレビを観ていた。何だろうと思つてのぞいてみると、海鳥が栄養不足で命を落としているというニュースだった。

「鳥たちもえさをとるのが大変なんだね。」

と、ぼくが言うと、お兄ちゃんは首をふった。

「そうじゃないんだ。人間が川にすてたプラスチックのごみが、海まで流れていって、それを海鳥がえさとまちがえて食べてしまっているんだ。もちろん、プラスチックに栄養なんかないから、それが原因で死んでしまうということなんだよ。」

ぼくはびっくりした。ぼくたちの遊んでいる川はあんなにきれいなのに。川を流れるごみが、海鳥の命をうばうこともあるのだなんて。



「そんなにごみってあるの。」

「今、地球の海の中に人間が出したプラスチックごみが、一億おく五千万トン※もあるんだって。信じられないよな。それに、こまっているのは、さっきの海鳥だけじゃないよ。海にうかぶプラスチックのごみは、だんだん細かくくだけてしずんでいき、水の中に住む生き物が食べてしまっているらしい。」

「えっ、一億五千万トン……。海鳥以外いがいの生き物も……。」

なんだか心が苦しい気持ちになった。テレビには、ごみがうかぶ海の中を泳ぐウミガメのすがたがうつし出されている。「学校の近くのあの川も、海につながっているんだよなあ。」テレビの画面をじっと見つめていたお兄ちゃんがつぶやいた。

「この海、なんとかしたいよな。」

その言葉が、ぼくの心にずしりとひびいた。

明日の放課後も、ぼくは、川に行こうと思う。みんなをさそって。



※一億五千万トン…一億五千万トンのプラスチックごみは、東京ドーム約三四五・六杯分。

離^{はな}れていても



「もう仁^{ひとし}くんにも、転校のことは伝えたの。」

母の言葉で、ぼくの気持ちは重くなった。ぼくは、父の仕事の都合で来月転校することが決まっていた。そのことを、親友の仁になかなか伝えられずにいたのだ。

「そろそろきちんと伝えた方がいいよ。」

母の言葉に、うかない顔でぼくは答えた。

「わかっているよ。一番最初に伝えたいとは思っているんだけど……。」

「仁くんとはずっと仲がよかったんだし、きちんと理由を話せばわかってくれるわよ。」

母のはげましの言葉に、ぼくの不安も少しやわらいできた。

帰りの会が終わった後、ぼくは仁を呼^よび止めた。

「仁に話しておきたいことがあるんだ。実は来月、お父さんの仕事の都合で、転校することになったんだ。まだだれにも言ってないんだけど、仁は親友だし、一番に伝えたかったんだ。」

「……。」

仁は下を向いてだまっている。ぼくは話を続けた。

「前に九州に住んでいるおじいちゃん、テレビ電話した話をしたことがあるって話したよね。今は、タブレットを使って遠く離^{はな}れている人とも、近くにいますような感じで会話ができるんだよ。だからさ……。今までと変わらないよね。ぼくたちは一番の親友でいられるよね。」



すると、だまって聞いていた仁が急に立ち上がって言った。

「すぐ会えない。近くにいない。離れていたら、友達を続けるなんて無理なんじゃないかな……。」

仁はそのまま教室を出て行ってしまった。ぼくは、ただだまって仁の後ろ姿を見ていた。

その日の夕方、ぼくは仁のことで頭の中がいっぱいだった。

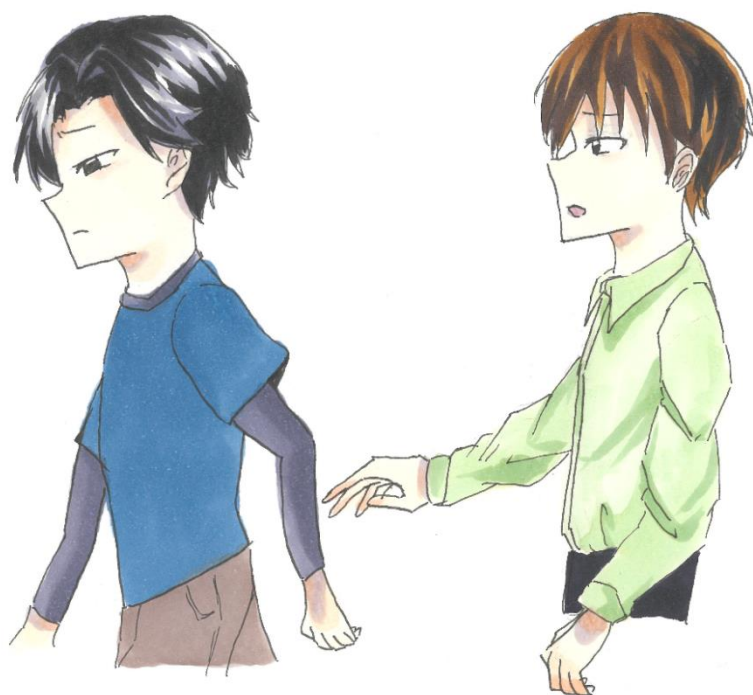
ぼくが部屋を出ると、父の部屋から声が聞こえてくる。ぼくは気になって、父の部屋をのぞいてみた。父のしているタブレッツの画面には、何人かの人が映っていた。どうやらオンライン上で会議をしているようだ。いつものおだやかな父とは少しちがって、仕事をしている時の顔つきになっている。

しかも、父は仕事の関係者と積極的に意見を言い合っている。時には大きな声で「いや、そういうことじゃなくて……」「つまり……。」と何度も同じことをくり返し説明している。ぼくは父の会議の様子をじっと見守っていた。

「今日はありがとう！すごく楽しい時間だったよ。」

オンライン会議が終わると、父は一緒に話合いに参加していた人たちと、互いに感謝の言葉を伝え合っていた。会議を終えた父に、ぼくは、自分が不思議に思っていることを伝えてみた。

「お父さん。直接会えないと、言いたいことが言いつらいし、気持ちも分かり合えないし、正直関わりづらくないの？直接会って、目の前で話したり、ずっと一緒にいたりしないと、関係ってこわれちゃ





うんじゃないかなって思うんだけど。」

ぼくの顔を見つめていた父が、にこりと笑って話し始めた。

「目の前にいても、オンラインでも、相手のことを信頼しんらいしているからこそ、言い合えるんだよ。遠く離れていたって、相手に伝えたいとか、相手を大切にしたいという思いは伝わるんじゃないかな。」

父の言葉を聞いた時、ぼくの頭の中に真っ先にうかんだのは、仁のことだった。

「お父さん、ありがとう！」

そういってぼくは、自分の部屋でスマートフォンを取り出し、仁に電話をかけた。

三ヶ月後、新しい町の、新しい学校生活にぼくもだいぶ慣れてきた。今日も新しくできた友達とドッジボールで盛り上がった。家に帰ってきたぼくに、父が声をかけた。

「今日は学校楽しかったか？」

「すごく楽しかった！そうだ、今日はこれから同じクラスのドッジボールのメンバーと、仁も入れてオンラインで作戦会議するんだ！」

と明るい声で答えるぼくを見て、父も思わず笑顔になっていた。

「離れていても、だな。」

父のその言葉を聞いて、ぼくは遠く離れた遠い場所で、自分と同じような笑顔の仁の顔を思いうかべていた。



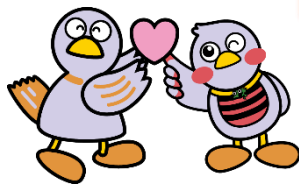
いつでも、
どんな場所でも
コミュニケーション
できる



たくさんの人と
意見を
交流できる



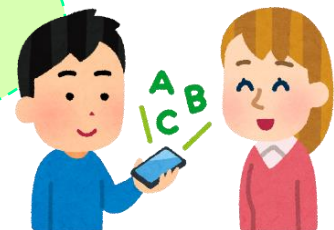
直接会えなくても
相手の表情が
見られる



大切なのは…
どう使うか
どのような思いで使うか



遠くの人とも
仲良くなれる



聞いたり、見たりが
難しくても
つながることができる

言葉や文化の
ちがう人とも
つながることができる

未来を見つめるまなざし



今日は、地域の小学校の六年生が、年に一度集ま
て行われる陸上競技大会だ。いくつか行われる競技の中
で、一〇〇メートル走が一番盛り上がる競技である。

「おい、見てみるよ。」

となりには陽太が指さす方に視線を向けると、続々と
入場してくる選手たちの中に、ひと際目を引く、テレビ
で見ると外国人アスリートのような姿の選手が目に入っ
た。いかにも足が速そうだ。いつもは自信満々な陽太も
めずらしく緊張しているようだ。

一〇〇メートル走競技も後半をむかえたところ、会場中
の視線が一点に集まった。いよいよ、陽太とあの選手が
一緒に走る最終組が、出走の準備に入ったのだ。

「ようい……。」

出発のピストルがひびくと、会場が一斉にわき上がった。
六人の選手の実力は互角だ。一気にゴールまでかけ
ぬけた。最終組を制したのは陽太だ。あの選手は三着で
ゴールした。力いっぱい走り切った選手たちに、拍手と

称賛^{しょうさん}の声がおしみなく送られている。そんな声に交じって、

「一着は確実だと思ったのに、見た目から期待するほど速くなかったなあ。」
という声が聞こえてきた。少なからず、ぼくも同じことを考えていたからだろう。三着に入ったあの選手のことを言っているのだと、すぐにピンときた。もちろん陽太を応援^{おうえん}していたのだが、心のどこかで、何かすごいものが見られるのではないかと期待していたのになんとなく裏切^{うらぎ}られた気分だ。

次の日の夜、夕飯を終えて家族でニュース番組を見ていると、アスリートたちの激闘^{げきとう}の様子が映^{うつ}し出された。今まさに、平和とスポーツの祭典・オリンピックが行われているのだ。表しよう台の上の選手は一段^{いちだん}とかがやいて見える。

「やっぱりかっこいいなあ。メダリストは。」

ぼくが思わずつぶやくと、新聞の夕刊を読んでいた父が思い出したように顔を上げた。

「先週見た番組で、ある選手が何度も挫折^{させつ}を乗り越えてきた様子が紹介^{しょうかい}されていて、感動していたところだったんだよ。メダルにとどかなかった選手たちにも、目には見えないそれぞれの道^{みち}のりがあったんだろうなあ。すべての選手に金メダルをかけてあげたいよね。」

その後もテレビを見続けていたぼくだったが、しばらくすると、さっきは何となく聞いていた父の言葉が気になりはじめ、昨日の陸上競技大会で





の出来事を思い出していた。三着の健闘けんとうにも期待外れとささやかれていた、あの選手のことだ。見た目を理由に「足が速いのがあたりまえ」そう言われているような彼が、今になって気の毒になってきた。

何よりもぼく自身が、彼の外見や三着の結果といった目に見えるものばかりにとらわれていたのではないか。ベッドに横になってからも、考えがぐるぐると頭の中をめぐり、その日はなかなか寝つけなかった。

いつもの公園で、陽太と待ち合わせて遊んでいると、陽太が話し始めた。

「あの大会の後、一緒に走ったあの選手とばったり公園で会ってさ。迷ったんだけど、話しかけてみたんだ。そしたらいいやつでさ、意気投合しちゃったよ。けっこうしっかり考えててさ。大会に向けて走り方を研究したみたいだし、何に対しても一生懸命いっしょうけんめいなやつなんだよ。おれ、中学行ったらさ、あいつと一緒に陸上やりたいな。」

そう言う陽太の目に見えていたのは、きっと見た目だけじゃない、彼の本当の姿だったのだろう。そのまなざしは、未来を見つめているようだった。

テレビの中のオリンピックも最終盤さいしゅうばんをむかえている。そこには、自分の精一杯せいいつぱいをかけてぶつかり合った者同士の、清々しい笑顔がかがやいている。

世界は広い。

「ぼくの目には見えていないことが、まだまだあるはずだ。」

そうつぶやきながら、ぼくは公園のジャングルジムの上から、白い雲のわいた夏の空を見上げていた。



話し合ってみよう

人権とは、誰もが生まれながらにして持っている人間として幸せに生きていくための権利で、私たちの日々の生活を支えるとても身近で大切なものです。

人権を尊重するとは、相手のことを自分のことと同じように考え、大切にすることです。思いやりの心をもって、お互いの違いや多様性を認め合うことが、誰もが幸せに暮らしていける「人権が尊重された社会」を築きます。（引用：埼玉県 HP より）

【関連するキーワード】

性別・子供・高齢者・障害のある人・出身地・国籍
病気をもった人・異なる文化をもった人 等

①「〇〇って……」

決めつけて話していることはないかな？

相手の気持ちを考えられているかな？

「男・女（性別）って△△だね」

「〇〇（こくせき国籍）人って△△だね」

「お年寄は△△なものだ」

②「〇〇があたりまえ」「ふつうは〇〇」「絶対〇〇」

私たちに必ず共通するものってあるのかな？

人によってどのような違いをもっているのかな？

「男・女なんだから普通は△△でしょう」

「子供なんだから△△してあたりまえ」

③「本当は〇〇なのに……」

もし、本当の自分自身とは違うことを決めつけられてしまったり誤解ごかいされていたりしたら、どうかな？

本当の自分を理解してくれる人、話を聞いて受け止めてくれる人は誰かな？

④「へんけん偏見」「差別」どのように向き合っていけるかな？

自分自身の中に見つけたとき、どうしよう？

親しい人の中に見つけたとき、何ができるかな？

世の中・社会にはどのようなこととして表れているかな？